

補文主語の標示：

カートグラフィー理論に基づく日・英語の比較*

田 口 茂 樹

1. はじめに

本稿では、日・英語における補文主語の格標示及びトピック標示について、カートグラフィー理論の観点から考察する。

はじめに、チョムスキー理論とカートグラフィー理論とがそれぞれに目指す目標について簡単に触れ、アプローチの仕方は異なりながらも、根本的には両者が同じ原理を基に言語を研究していることを明らかにする。また、両者の到達目標と統語構造の派生型式について言及し、トップダウン型派生ではなくボトムアップ型派生を共有すべきであるという見解と根拠を提示する。本稿の構成は以下の通りである。

第2節では、カートグラフィー理論とチョムスキー理論の到達目標を考察し、前者が誕生するに至った経緯を概観する。

第3節では、日・英語の比較研究の観点から、例外的格標示構文の補文における時制について議論する。時制の下位分類によって補文主語の格標示が決定される、という立場に基づき、格認可のシステムについて考察する。

第4節では、日本語の補文における「は」トピックと裸足のトピックの非対称性を指摘し、カートグラフィー理論に基づいた新たな分析を提案する。

第5節では、結語に加え、カートグラフィー理論が今後さらに発展していく可能性に言及する。

2. カートグラフィー理論とチョムスキー理論

Rizzi (1997) 等に端を発するカートグラフィー理論は、簡潔さを追究するチョ

ムスキー理論を補完するものと捉えるのが妥当であろう。つまり、より簡潔な統語構造や派生を用いて限られた言語データを説明するチョムスキー理論に対し、カートグラフィー理論は構造自体を精緻化することで、より広範な言語データの説明を試みるという目標を掲げている。

生成文法の黎明期から脈々と続いてきた基本的な考え方では、文法は自然科学の一分野と位置づけられている。即ち、文脈などを言語外的な要因として極力排除し、理想化された話者による命題としての文を分析対象としてきた。これに対し、カートグラフィー理論では、文脈に留まらず、情報構造や発話力といった、命題を越えるレベルの言語データに着目し、それらを精緻化された機能範疇の投射によって説明しようとする¹⁾。

本節では、カートグラフィー理論とチョムスキー理論が、言語を研究対象とする理論として互いに相容れない訳ではなく、基本的に共通の理念に基づいた研究であることを述べる。

2. 1. トップダウン型派生とボトムアップ型派生

Chomsky (1995) が提唱したミニマリスト・プログラムにより、統語構造の分析は大きな転機を迎えることになる。Chomsky (1981) に代表される原理・パラメーター理論までトップダウンで派生されてきた構造が、ボトムアップで派生されると仮定されるようになったのである。また、Chomsky (2001) 以降は、統語構造がボトムアップで派生される際には、フェイズという単位を基準に併合と移動が適用し、複数回に分けてスペルアウトされる、という多重スペルアウト・モデルに基づくアプローチが主流となった²⁾。

ここで着目したいのが、原理・パラメーター理論で主役的役割を担ってきた束縛理論が、ミニマリスト・プログラム以降あまり議論されなくなった点である。フェイズごとに派生が完結する多重スペルアウト・モデルでは、節境界が分析の根幹を成しており、フェイズ単位の派生との整合性が保てないことも事実である。(1)、(2)における、代名詞と照応詞の分布を考察してみよう。

- (1) a. *John_i hates him_i
b. John_i thinks [_{CP} that Bob hates him_i]

- (2) a. John_i hates himself_i
 b. *John_i thinks [_{CP} that Bob hates himself_i]

(1) a では、代名詞の *him* が、同じ節の先行詞 *John* によって束縛されているため、非適格文となる。(1) b では照応詞の *himself* が、別の節の先行詞 *John* によって束縛されているため、適格文である。一方、(2) a の *himself* は、同じ節の先行詞 *John* によって束縛されているため、適格文となる。そして、(2) b の *himself* は、別の節の先行詞 *John* によって束縛されているため、非適格文となる。これは、トップダウン型派生を採用する原理・パラメーター理論では理にかなった分析である。

問題は、(1)、(2) における節境界の CP が、多重スペルアウト・モデルにおけるフェイズとオーバーラップしている点である。(1) a、(2) a は単文であるため問題ないが、(1) b、(2) b における *him* と *himself* は、先行詞 *John* が派生に投入される前にスペルアウトされてしまうため、先行詞との束縛関係が確立できないことになる。つまり、(3) a のフェイズが完結し、その領域がスペルアウトされた後に主文主語が併合されるため、(3) b における *John* と *him* が束縛関係の統語的計算において同一指示関係を結ぶことはあり得ない。同様に、(4) a のフェイズが完結し、その領域がスペルアウトされた後に主文主語が併合されるため、(4) b における *John* と *him* が非同一指示関係にあることが説明できない。

- (3) a. [_{CP} Bob hates him_i]
 b. John_i thinks [_{CP} that Ø] (Ø = Bob hates him_i)
 (4) a. [_{CP} Bob hates himself_i]
 b. *John_i thinks [_{CP} that Ø] (Ø = Bob hates himself_i)

この問題を踏まえると、ボトムアップ型派生を想定するモデルにおいては、束縛理論はもはや顕在的統語部門で扱う分野ではなくなるのも無理はないだろう。結局は、論理形式 (LF) における意味解釈の問題として処理されるのが適切だと考えられる³⁾。

2. 2. カートグラフィー理論の派生型式

チョムスキー理論における派生型式が、トップダウン型からボトムアップ型に移行したことを上で見たが、カートグラフィー理論ではどうであろうか。本稿では、Maeda (2017) に倣い、カートグラフィー理論もボトムアップ型派生を採用すると仮定する。

ボトムアップ型派生を支持する根拠として最も重要だと思われるのが、経済性の原理である。カートグラフィー理論は経済性の原理をチョムスキー理論から継承しているため、統語的派生は可能な限り簡潔である必要がある。まずは Chomsky 理論を基に、(5) a のトピック化構文を分析してみよう。(5) a が、移動操作を経て (5) b のように派生されると考えるとどうなるであろうか⁴⁾。

- (5) a. John_i Mary loves t_i
b. [_{TopP} John_i [_{TP} Mary loves t_i]]

トップダウン型、ボトムアップ型に関わらず、目的語位置に基底生成された *John* が [+topic] といった素性を内在的に持っており、その認可を受けるために TopP 指定部へ移動する、と分析するのが妥当であろう。しかし、トップダウン型派生を採用した場合、(5) b の派生は極めて非経済的な派生であるといえる。なぜなら、<トピック>と解釈される *John* が、それより前に TopP が投射されているにも関わらず、一旦目的語位置に基底生成され、さらに [+topic] 素性によって TopP 指定部に移動するという、二つの段階を経た派生を想定せざるを得ない。一方カートグラフィー理論は、精緻化された機能範疇の投射を有していることから、<トピック>の名詞句側に移動を誘引する [+topic] のような素性を付与するメリットは見当たらない。従って、移動を牽引するのは機能範疇側が持つ基準(criteria)であると考えるのが妥当である^{5), 6)}。このことから、カートグラフィー理論における構成素の移動は、ターゲットとなる機能範疇が上位の階層に投射する場合にのみ適用し、投射しない場合は基底生成位置に留まっても派生は崩壊しない、という結論が得られる。要するに、ボトムアップ型派生は、チョムスキー理論においてもカートグラフィー理論においても必然的な選択だということである。

最後に、ボトムアップ型派生と多重スペルアウト・モデルが相互に作用することによって得られるメリットについて簡単に触れておく。そもそもトップダウンによって (5) の派生を分析した場合、経済性を満たすためにはどのような選択肢があるだろうか。一つ例を挙げるとすれば、TopP が投射した時点で<トピック>の *John* をその指定部に併合して [+topic] 素性を照合し、*John* は意味役割の認可を受けるために目的語位置へ非顕在的移動する、という分析である⁷⁾。この分析を用いれば、派生に関する経済性や合理性は十分に担保されるように思われる^{8), 9)}。こういった派生ではなく、多重スペルアウト・モデルが採用された背景として、Chomsky (2000) はワーキング・メモリーの負担軽減を挙げている。(5) の派生を例にとると、最も高い階層にある<トピック>名詞句が、最も低い位置にある動詞の目的語位置へ下降するという派生は、話者の記憶に大きな負担を強いることになる。この点に関してはカートグラフィー理論も決して例外ではなく、ボトムアップ型派生を基に統語構造を分析することは、理論的にも経験的にも十分理にかなっているといえよう。ただし、カートグラフィー理論において多重スペルアウト・モデルを採用すべきか否かについては、今後の研究課題としたい。

3. 格標示と補文の時制

前節では、カートグラフィー理論とチョムスキー理論との類似点を指摘し、両者ともにボトムアップ型で派生されるのが望ましいことを見た。本節では、ボトムアップ型派生を念頭に、補文主語の格標示がどのように行われるか、つまり、補文内の格交替現象がどのように説明されるかを考察する。3.1 節では補文の時制について、3.2 節では、3.1 節で提案した分析が、日・英語双方の例外的格標示構文を説明できるか否かを検証する。

3.1. 補文の時制

(6) a のような一般的な格標示に対し、(6) b は例外的格標示と呼ばれ、Postal (1974) を代表として盛んに議論されてきた。前者では、補文が定時制節であり、補文主語が主格で現れている。一方後者では、補文の時制が不定で、補文主語

は対格で現れている¹⁰⁾。他方 (7) では、これが逆になっている。(7) a は定時制節の主語が対格になっており、(7) b は不定時制節の主語が主格となっている。

- (6) a. *John_i believes [that he_i is honest]
 b. John_i believes [himself_i to be honest]
- (7) a. *John_i believes [he_i to be honest]
 b. *John_i believes [that himself_i is honest]

Postal (1974) は、(6) b において対格で標示されている補文主語が、主文の目的語位置に上昇する、と主張した¹¹⁾。上で見た束縛理論の観点から考えても、補文主語の *himself* と先行詞の *John* は同節要素 (clause mate) であると断定することは妥当だと思われる。問題は、例外的格標示構文における補文の統語的カテゴリーである。つまり、補文が CP であるか TP であるかにより、派生に対する制約が大きく異ってくるのである¹²⁾。例えば、補文が CP であると仮定し、束縛関係の樹立を勘案すると、*himself* は補文主語の位置から主文目的語の位置へ移動する必要がある。この場合、二通りの派生方法が考えられる。一つは連続循環移動 (successive cyclic movement) によって CP 指定部を経由して主文目的語位置に移動するというもので、もう一つは補文主語の位置から主文目的語位置へ一挙移動 (one fell swoop movement) するというものである。しかし、どちらを採っても適格な派生は得られない。(8) に示した通り、連続循環移動の場合は、*himself* が補文主語の位置である A 位置から、CP の指定部である A 位置を経て、さらに補文主語の位置である A 位置への移動となるため、非適正移動 (improper movement) として排除される。また、補文主語の位置から主文目的語位置へ一気に移動する場合、段階的に適用すべきスペルアウトを無視してフェイズを越えることとなり、Chomsky (2008) のフェイズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition) に抵触する非適格な移動だとみなされる。

- (8) a. John believes himself_i [_{CP} [_{TP} *t_i* to be honest]]
 b. John believes himself_i [_{CP} *t_i* [_{TP} *t_i* to be honest]]

ここで着目すべきは、補文の時制である。例外的格標示構文における補文内では、原則的に状態述語のみが許されると言われている。(9) bが適格文であることから、全ての不定詞節において状態述語が要求されるわけではないということは明らかである。つまり、(9) aの例外的格標示構文における不定詞節は、やや特殊な性質を持っていると考えるべきであろう。

(9) a. *John_i believes himself to act quickly¹³⁾

b. It is easy for John to act quickly

本稿では、Bošković (1997) の提案を援用し、例外的格標示構文における時制の特異性が、不定時制の下位分類によって説明されると考える。つまり、状態性のみを認可する例外的格標示構文の時制は不活性 (defective) であるため、Cによって選択されても即座にスペルアウトされない、と仮定するのである。この結果、事実上CPはフェイズとしての地位を喪失し、(8) aのように、フェイズ不可侵条件に違反することなく主文目的語位置へ一挙移動できるということになる。では、(8) bに示される連続循環移動の場合はどうであろうか。この点については、カートグラフィー理論の考え方が有効であると考えられる。上で述べた通り、カートグラフィー理論における移動は、上の階層に併合される機能範疇が持つ基準を満たすために適用する。だとすると、(8) bにおける補文主語の *himself* は、CPの指定部に移動した時点で二つの選択を迫られることになる。一つは、非適正移動の違反を無視して主文の CaseP[ACC]に移動するというオプション、もう一つは補文のCPに留まるというオプションである。後者に従った場合、格標示の観点から適切な派生が得られないことから、前者の派生を検討してみよう¹⁴⁾。カートグラフィー理論では、一つの基準を満たした構成素は、同じ基準を満たすための移動ができない、とする基準凍結 (critical freezing) が導入されている (Rizzi (2006) 他参照)。(8) bにおいて、仮に何らかの基準が補文CPに付与されていたとしても、それはトピックやフォーカスなどのAバー移動に関与するものである。一方、(10)に示される、補文CPから主文CaseP[ACC]への移動はA移動であり、「格基準」とでも呼ぶべき基準を満たすための移動であるため、基準凍結の違反は起こらない¹⁵⁾。

(10) John believes [_{CaseP[ACC]} himself_i [_{CP} t_i [_{TP} t_i to be honest]]]

3.2. 日本語の例外的格標示構文

ではここで、日本語の例外的格標示構文に目を向けてみよう。(11)に見る通り、日本語でも補文主語が主格と対格とで交替する。

- (11) a. ジョンは [自分が 正直だと] 思っている
b. ジョンは [自分を 正直だと] 思っている

共通点としてまず挙げられるのは、補文の時制である。つまり、英語の例外的格標示構文と同様、補文は原則的に状態述語を選択しなければならない。この点については、(12) a が、英語の (9) a と同様に非適格文であることから妥当な観察だといえる。

(12) *ジョンは自分をテキパキ行動すると思っている¹⁶⁾

以上のような日・英語共通に見られる観察を踏まえ、以下では日・英語の例外的格標示構文を、可能な限り統一的に説明することを試みる。

まず、英語と同様、補文時が不活性であると仮定できるか検証しよう。この仮定については若干注意が必要である。日本語の場合、標準的格標示であっても例外的格標示であっても、補文の時制が断定の助動詞「だ」の終止形で終わっている。つまり、不定詞節を選択する英語の例外的格標示構文とは異なり、日本語では補文主語の標示が主格であろうと対格であろうと、補文は定時制を有すると考えるのが自然であろう。このため、日・英語の例外的格標示構文を統一的に説明することは無理があるように感じられるかも知れない。しかし、日本語の時制について定・不定を判定するためには、より詳細な研究を要すると考えられる。特にカートグラフィー理論では、形式的或いは文法的な時制と、実際の言語運用における時制解釈とのギャップ（遠藤（2014）他）、アスペクトとの相関性（宗宮（2007）他）といった、統語論の域を越えた意味的・談話的要因が考慮される。殊に補文の場合、主文動詞に左右される相対時制（relative

time) となる傾向が強い。例えば、主文動詞が現在形で現れる (13) a では、ジョンが正直であるかどうかについては中立的或いはやや肯定的な解釈が得られるのに対し、過去形で現れる (13) b では、ジョンが正直ではないというニュアンスが強くなる。

- (13) a. ジョンが正直だとしたら、嫌われることはない
b. ジョンが正直だとしたら、嫌われることはなかった

一方、例外的格標示構文では主文動詞が認識動詞であり、補文が表す命題内容に対して、話者がどう判断するかを述べるのが主たる機能である。このため、主文動詞が過去形で現れても (13) のような対照は見られない。(14) は、現在とはともかく、過去に自分が正直であったことを真として判断する解釈のみが可能である。

- (14) ジョンは自分を正直だと思っていた

以上に見た通り、日本語の例外的格標示構文における時制に関しては、相対性、認識動詞との関連性、意味的・談話的な視点など、様々な要因が複雑に絡み合っており、本稿のような小論で理論的な説明を加えることができるほど単純な問題ではないと考えられる。従って、以下では、日本語の補文における状態述語は、時制が不活性であるため、主文目的語位置への移動を阻止しない、と述べるに留めておく。なお、第4節では、日本語の例外的格標示構文においては時制以外の要因が関与している可能性を考察する。

次に、日本語でも (15) a と (15) b の二通りの派生が可能であると考えてみよう。

- (15) a. ジョンは $[_{CaseP[ACC]} \text{自分を}_i [_{CP} [_{TP} t_i \text{正直だ}]]]$ と 思っている]
b. ジョンは $[_{CaseP[ACC]} \text{自分を}_i [_{CP} t_i [_{TP} t_i \text{正直だ}]]]$ と 思っている]

まずは、英語と同じ分析が当てはまるかを検証する。(15) b では、「自分を」が

主文 CaseP[ACC] へ一挙移動している。この派生は、フェイズ不可侵条件の違反となるため、許容されないはずである。しかし、日本語においても例外的格標示構文の補文 TP が不活性だと仮定すれば、C によって選択されても即座にスペルアウトされない、という上述の分析が当てはまり、適格文であることが説明できる。一方 (15) b では、「自分を」が連続循環移動の適用を受けている。この結果、「自分を」は、一旦補文 CP の指定部に移動し、更に主文の CaseP[ACC] へと移動することになる。英語の (8) b における *himself* の場合と同様、補文 CP から主文の CaseP[ACC] への移動は A 移動であり、格基準を満たすための移動であるため、基準凍結の違反は起こらない。

以上、本節では、日・英語の例外的格標示構文が、不定時制の下位分類によって統一的に説明できる可能性を探った。

4. トピック性に関する主文・補文の非対称性

本節では、Taguchi (2009, 2015) の観察を基に、日本語の例外的格標示構文の特性を、カートグラフィー理論の視点から分析する。簡潔に言うと、同構文の補文主語は、単なる主語というよりもトピックと類似した意味解釈を受ける、というものである。4.1 節では、日本語の「は」トピックと裸足のトピック (bare topic) のデータを概観する。4.2 節では、4.1 節で考察したデータを、例外的格標示構文との関連で考察し、カートグラフィー理論の観点から分析する。

4. 1. 「は」トピックと裸足のトピックの類似点

日本語のトピックが副助詞の「は」によって表されることは、国語学のみならず、生成統語論でも定説となっている (Kuno (1973) 他)。一方、「は」トピックほど盛んに取り上げられてこなかったものの、無標、つまり「は」の付かないトピックというものが存在する。三上 (1960) が着目した「裸足のトピック」という統語現象である¹⁷⁾。Taguchi (2009, 2015) は、これら二つのタイプのトピックを比較し、両者の違いを考察した (Takita (2014)、Dohi (2020) 他参照)。

まずは、Taguchi (2009, 2015) が提示した例文を、より簡潔かつ自然にな

るよう修正したものを以下に挙げる。

- (16) a. 言ったことは、みんなは覚えているよね
- b. 言ったこと、みんなは覚えているよね

(16) a、(16) b 共に、補文における「覚えている」の主語を、主文主語である「みんな」とする解釈は難しい¹⁸⁾。これは、かき混ぜ (scrambling) が適用した (17) と好対照を成す。つまり、(17) における「言ったことを」は、かき混ぜの適用後に再構築 (reconstruction) の適用を受け、目的語位置で解釈されるのに対し、(16) a、(16) b における「は」トピック「言ったことは」及び裸足のトピック「言ったこと」は、再構築の適用を受けないということになる (Saito (1985, 1989) 他参照)。端的に言えば、「は」トピックと裸足のトピックは、目的語位置からトピックの位置に移動するのではなく、トピックの位置に基底生成されていると考えるのが妥当だということである (Hoji (1985)、外池 (1990)、三原 (1994) 他参照)。

(17) 言ったことを、みんなは覚えているよね

(16) と (17) の対照から、それぞれ (18) と (19) の派生を仮定する。

- (18) a. 言ったことは_i、みんなは pro_i 覚えているよね
- b. 言ったこと_i、みんなは pro_i 覚えているよね
- (19) 言ったことを_i、みんなは t_i 覚えているよね

以上、「は」トピック及び裸足のトピックは、かき混ぜによる派生とは異なり、トピックの位置に基底生成されることを見た。以下では、英語の (5) b と同様、(16) のような日本語のトピック表現が TopP の指定部に位置するという前提で議論を進める。4.2 節では、これら二つのトピック表現が、補文節に現れるか否かに関して非対称性を見せることを論ずる。

4. 2. 「は」トピックと裸足のトピックにおける主文・補文の非対称性

まずは (20) の例を考えてみよう。ここでは、述語が、対格目的語を取らない状態動詞となっている点が、(16) とは異なる。(16) と同様、(20) の補文における「できる」の主語を、主文主語である「みんなは」とする解釈は難しい。

- (20) a. 言ったことは、みんなはできるよね
b. 言ったこと、みんなはできるよね

「言う」という行為の主語として空代名詞 (empty pronoun) の *pro* を仮定すると、以下のように表示することができる。

- (21) a. * $[pro_i$ 言ったことは] みんなは $_i$ できるよね
b. * $[pro_i$ 言ったこと] みんなは $_i$ できるよね

では、ここで (20) の例が補文内に出現できるか否かを検証してみよう。¹⁹⁾

- (22) a. ジョンは、(大抵の場合) 言ったことは、みんなができると思っている
b. *ジョンは、(大抵の場合) 言ったこと、みんなができると思っている

(22) a と (22) b の非対称性は、何に起因するのであろうか。この問題を、2.1 節で考察した英語の例外的格標示構文の分析に照らし合わせて考察していく。

大前提として、トピック化が補文で適用できるのか否かが根本的な問題である。まずは英語におけるトピック化の例として、(23) を見てみよう。Bošković and Lasnik (2003) によると、英語の場合、補文標識の *that* が現れる場合に限り、補文内でのトピック化が可能である。

- (23) I believe *(that) John_i, Mary loves t_i

Miyagawa (2017) は、Hooper and Tompson (1973) による叙実動詞 (factive verb) と非叙実動詞 (non-factive verb) の分類を基に、補文内でのトピック化

の可否を検証している。その分類によると、日本語の「思う」のような動詞は、英語の *believe* と同じクラスに属しており、トピック化を容認する動詞とされている。むしろ (22) b は、(22) a に比べて (23) により近い表現であるように感じられるにも関わらず、裸足のトピックが許容されないのはなぜであろうか。

そこで、(22) b の非文法性が、主節、つまり上の階層の要求から生じると仮定してみよう。即ち、主節の「思う」の上に投射した機能範疇の CaseP[ACC] である。

- (24) a. ジョンは [_{CaseP[ACC]} 言ったことは_i [_{TopP} *t_i* みんなができると]] 思っている
- b. *ジョンは、 [_{CaseP[ACC]} 言ったこと_i [_{TopP} *t_i* みんなができると]] 思っている

ここで、Postal (1974) による、英語の例外的格標示構文の分析を振り返ってみよう。(8)、(10) に示した通り、補文主語は主文の目的語位置へと上昇する。これに従い、(24) a、(24) b ともに、補文主語は主文の目的語位置へ上昇すると仮定する (Kuno (1976) 他参照)。両者の文法性に関する非対称性は、次のように説明できる。(24) a では、CaseP[ACC] の要求に応じるため、補文主語の「言ったことは」が主文の目的語位置へ移動する。しかし、日本語の副助詞、つまりトピック標示詞「は」は、格助詞、つまり格標示詞「を」を吸収する。つまり、(25) から分かる通り、「は」と「を」は共起できないのである。

- (25) ジョンは、(大抵の場合) 言ったことは (*を)、みんなができると思っ
ている

一方 (24) b では、補文主語の「言ったこと」が CaseP[ACC] の要求に応じて主文の目的語位置に移動したものの、それが音声的に具現されていない。これは、Chomsky (1995) が言うところの完全解釈の原理 (Principle of Full Interpretation) の違反となる。従って、この原理を満たすためには、(26) b の派生を経て (26) a のように具現されなくてはならない。

- (26) a. ジョンは、(大抵の場合) 言ったことを、みんなができると思っている
 b. ジョンは、 $[_{\text{CaseP[ACC]}} \text{言ったことを}_i \text{ } [_{\text{TopP}} t_i \text{ みんなができると }]]$ 思っている

最後に二点、確認しておくべきことがある。一つは、なぜ裸足のトピックが主文で認可されるのか、という問題である。これに対する答えは至って単純である。要するに、上の階層に CaseP[ACC] などの投射が存在せず、そのまま TopP の指定部で認可されるからに過ぎない。逆に言えば、上の階層に CaseP[ACC] が無いにもかかわらず、補文主語が対格で標示された場合も完全解釈の原理に違反し、当然非適格となる。(27) の文法性を検証してみよう。注意すべきは、「できる」が対格目的語を取れないことから、標準的な日本語では非文法的であるという点である。日常会話では誤用としてしばしば見られる表現であるため、文法性判断として「?」を付してあるが、この容認度の高さは、以下に見る補文主語の意味解釈に対して興味深いパラドックスを生み出すことになる。

- (27) ?言ったことを、みんなはできるよね

二つ目の確認事項は、(26) a における補文主語「言ったことを」の意味解釈である。もしこれが (20) b と同様に裸足のトピックであるなら、意味解釈も同一となることが予想される。実際、(26) a では、「言ったことを」の主語を「みんなが」として解釈することはできない。従って、(28) のような派生・構造を想定するのが妥当だと考えられる。

- (28) ジョンは、 $[_{\text{CaseP[ACC]}} \text{言ったことを}_i \text{ } [_{\text{TopP}} t_i \text{ みんなが } \text{pro}_i \text{ できると }]]$ 思っている

ここで再び (27) の文法性判断を検証しよう。もしこの文が適格ならば、「言ったことを」は「できる」の目的語として解釈する他ない。この点を基に (26) a の意味解釈を再考すると、以下のようなパラドックスが生じる。まず、「言った

ことを」は「できる」の目的語の位置から、かき混ぜによって文頭へ移動する。次に、再構築によって再び「できる」の目的語の位置へ戻るため、(29)における痕跡 (t_i) の位置でも解釈が可能であると予測されてしまうのである。

(29) ジョンは、[[pro_i 言ったことを]_i みんなが t_i できると] 思っている

このような文法性判断や意味解釈の揺れを、カートグラフィー理論の視点から考察する研究が、現在進行中である。カートグラフィー理論は、個人語 (idiolect) を対象とした理論的研究も行っており、上述のパラドックスを含め、非常に興味深いテーマが扱われている。

以上、本節では、日本語の例外的格標示構文の特性について、カートグラフィー理論に基づく分析を試みた。同構文における補文が、裸足のトピック構文が埋め込まれたものであり、主文の機能範疇の要求を満たすために移動して対格標示を受ける、という分析を行った。

5. 終わりに

本稿では、日・英語における補文主語の標示について、カートグラフィー理論の観点から考察した。

まずはチョムスキー理論とカートグラフィー理論における派生型式について言及し、ボトムアップ型派生を支持する見解と根拠を提示した。

カートグラフィー理論におけるボトムアップ型派生を念頭に、基本的には日・英語における補文主語の格標示に対して統一的分析を試みた。特に補文の時制が不活性である点、フェイズ不可侵条件や非適正移動の問題を通して、基本的に日・英語では同じ分析が適用できることを述べた。また、日本語の例外的格標示構文の特異性に鑑み、トピックの概念を導入した分析を行った。「は」を伴うトピックと伴わないトピックに関する主文・補文の非対称性を論拠とし、裸足のトピックが認識動詞の補文として埋め込まれているという主張を、意味解釈の観点から例証した。

結語として、カートグラフィー理論の今後の発展・拡大について言及してお

きたい。上述した通り、カートグラフィー理論は、今まで研究対象とされてこなかった領域を開拓する言語理論である。様々な立場から言語を扱う枠組の司令塔として、日本国内においても発達・発展していくことを願ってやまない。

註

* 本研究は JSPS 科研費 JP19K13158 の助成を受けたものである。

- 1) この点に対するチョムスキー理論側からの批判、及びそれに対するカートグラフィー理論側からの説明については、遠藤・前田 (2020) を参照。
- 2) 厳密には、Uriagereka (1999) によって提案されたモデルである。
- 3) ミニマリスト・プログラムでは LF が破棄されているため、束縛理論や数量詞のスコープ解釈がどのレベルで適用するのかについては議論の余地があると思われる。また、非顕在的移動という概念、つまりスペルアウト後に束縛関係の意味解釈がどのように計算されるのかについても、より原理的な説明が必要だと考えられる。
- 4) 説明を簡素化するため、ここでは演算子移動ではなくトピック名詞句が直接 TopP に移動すると仮定している。空演算子移動に基づく派生に関しては Chomsky (1977) を参照。
- 5) Rizzi (1997) が想定する基準とは、A バー移動する構成素と移動先の機能範疇との間で、指定部・主要部一致関係により満たされるものである。
- 6) 移動の動機付けに関しては、大きく二つの立場が挙げられる。移動する構成素側の要求によるものとする Chomsky (1995) 他と、移動先の機能範疇の要求にするものとする Lasnik (1995) 他である。その後の理論的發展により、後者の考えは拡大投射原理素性 (EPP feature) や端素性 (Edge feature) の照合といった形でチョムスキー理論に組み込まれていくことになる。
- 7) 併合と移動のどちらが経済的か、という問題に関しては見解が分かれるところであったが (前者に関しては Chomsky (1995) 他、後者に関しては Shima (2000) 他参照)、Chomsky (2013, 2015) では、自由併合 (Free Merge) という概念が導入されている。このことから、Chomsky (1995) 以来支持されてきた見解、即ち併合の方がより経済的であるという立場が支配的であることが分かる。
- 8) 事実、Bošković and Takahashi (1998) は、意味役割を形式素性の一種とみなし、それを照合するために LF で目的語位置へ下降する、という派生を提案している。
- 9) この考えは、顕在的移動よりも非顕在的移動の方がより経済的である、という Chomsky (1995) の主張に立脚している。
- 10) 主文動詞に関しては、日本語の「思う」との対応表現として *think* を使うのが適切かも知れない。しかし、*think* による例外的格標示の用法は標準的ではないため、本稿では慣例に倣い *believe* を用いることにする。なお、遠藤 (2014, p. 73) では、(i) のよう

な例文が提示されていることから、*think* を用いた例外的格標示が完全に非適格というわけではないようである。

(i) John thinks [him to be honest]

11) この分析は、Lasnik and Saito (1992)、Koizumi (1995)、Bošković (1997, 2007)、Lasnik (1999a,b,c) をはじめ、多くの論考に継承されることになる。

12) ここでは例外的格標示構文の補文が TP であるとする分析は深く追究しない。以下に見る日本語の例外的格標示構文では、補文は原則的に「と」を伴う CP であり、日・英語における同構文を統一的に分析することに主眼を置いているためである (Bošković (1997) 他参照)。

13) この文は、補文の述語を、コピュラを用いた状態述語に変えると容認可能となる

(i) John_i believes himself to be a man who acts quickly

14) ここでは、原理・パラメーター理論の視点から説明を行っている。つまり、CP は節境界となるので、主文領域に移動しなければ主文主語と同一指示関係は結べない。ただし、Chomsky (2008) のフェイズ理論では、CP の左端、即ち CP 指定部は、主文からのアクセスが可能である。もし束縛理論がフェイズ理論で説明されるとすれば、(8) b の派生は問題ないと思われる。ただし、上に述べたとおり、多重スベルアウト・モデルで束縛関係を説明できるかどうかは定かではない。何らかの理論的修正が必要になるとと思われることから、本稿では深く立ち入らないことにする。

15) A バー領域での議論が中心となっているカートグラフィー理論で、非適正移動という概念がどのように扱われるかについては本稿の範囲を超える問題である。

16) この文は、英語の場合と同様、補文の述語を、コピュラを用いた状態述語に変えると容認可能となる。

(i) ジョンは自分をテキパキ行動する人間だと思っている。

17) 三上は「はだしの話題」という呼称を用いている。

18) 岸本秀樹氏 (私信) によると、(16) の「言ったことは」及び「言ったこと」の主語として「自分が」を挿入すれば、「覚えている」の主語を「みんな」とする解釈が可能である。

(i) 自分が言ったことは、みんな覚えているよね

(ii) 自分が言ったこと、みんな覚えているよね

これは、「自分」が意識主体照応性 (logophoricity) を持っていることの証左であり、カートグラフィー理論での研究が期待されるテーマであると考えられる (Sells 1987 他参照)。

19) (22) では、多重トピックによる不自然性を解消するため、(22) a の「は」トピックにおける「みんなは」を、主格の「みんなが」に置き換えた。これによる論証への影響はほぼ無いと考えられる。また、(22) a の「言ったことは」は、対照 (contrast) としての解釈も可能である。この解釈が軽減されるよう、一般性を強調する「大抵の場合」を任意の要素として付加した。

参考文献

- Bošković, Ž. (1997). *The syntax of nonfinite complementation: An economy approach*. Cambridge, MA: MIT press.
- Bošković, Ž. (2007). On the locality and motivation of Move and agree: An even more minimal theory. *Linguistic inquiry*, 38, (4), (pp. 589-644).
- Bošković, Ž., & Takahashi, D. (1998). Scrambling and last resort. *Linguistic inquiry*, 29, (3), (pp. 347-366).
- Bošković, Ž., & Lasnik, H. (2003). On the distribution of null complementizers. *Linguistic inquiry*, 34, (4), (pp. 527-546).
- Chomsky, N. (1977). On wh-movement. In P. W. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian (Eds.), *Formal syntax* (pp. 71-132). Cambridge, MA: MIT press.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1995). *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT press.
- Chomsky, N. (2001). Derivation by phase. In M. Kenstowicz (Ed.), *Ken Hale: A life in language* (pp. 1-54). Cambridge, MA: MIT press.
- Chomsky, N. (2000). Minimalist inquiries: The framework. In R. Martin, D. Michaels, J. Uriagereka, and S. J. Keyser. *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik* (pp. 89-155). Cambridge, MA: MIT press.
- Chomsky, N. (2008). On phases. In R. Freidin, C. P. Otero, and M. L. Zubizarreta (Eds.), *Foundational issues in linguistic theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud* (pp. 133-166). Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (2013). Problems of projection. *Lingua*, 130, (pp. 33-49).
- Chomsky, N. (2015). Problems of projection: Extensions. In E. D. Domenico, C. Hamann, and S. Matteini. (Eds.), *Structures, strategies and beyond: Studies in honour of Adriana Belletti* (pp. 1-16). Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Dohi, A. (2020). CP-internal discourse particles and the split ForceP hypothesis. *Lingua*, 233, 102757.
- 遠藤喜雄. (2014). 『日本語カートグラフィー序説』. 東京: ひつじ書房.
- 遠藤喜雄・前田雅子. (2020). 『カートグラフィー』. 東京: 開拓社.
- Hoji, H. (1985). *Logical form constraints and configurational structures in Japanese* (Doctoral dissertation, University of Washington).
- Hooper, J. B., & Thompson, S. A. (1973). On the applicability of root transformations. *Linguistic inquiry*, 4, (4), (pp. 465-497).
- Koizumi, M. (1995). *Phrase structure in minimalist syntax*. (Doctoral dissertation, MIT).
- Kuno, S. (1973). *The structure of Japanese. Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuno, S. (1976). Subject raising. In M. Shibatani (Ed.) *Japanese generative grammar* (pp.

- 17-49). New York: Academic Press.
- Lasnik, H. (1995). Case and expletives revisited: On Greed and other human failings. *Linguistic inquiry*, 26, (4), (pp. 615-633).
- Lasnik, H. (1999a). Chains of arguments. In S. Epstein and N. Hornstein (Eds.), *Working minimalism* (pp.189-216). Cambridge, MA.: MIT Press.
- Lasnik, Howard. (1999b). *Minimalist analysis*. Malden, MA. and Oxford: Blackwell.
- Lasnik, Howard. (1999c). On Feature Strength: Three minimalist approaches to overt movement. *Linguistic inquiry* 30, (2), (pp. 197-217).
- Lasnik, H., & Saito, M. (1992). *Move α : Conditions on its application and output*. Cambridge, MA.: MIT press.
- Maeda, M. (2017). Review: *Beyond functional sequence: The Cartography of syntactic structures*, *English Linguistics*, 34, (3), (pp. 117-128).
- 三原健一. (1994). 『日本語の統語構造：生成文法理論とその応用』. 東京：松柏社.
- 三上章. (1960). 『象は鼻が長い：日本文法入門』. 東京：くろしお出版.
- Miyagawa, S. (2017). Topicalization. *Gengo kenkyu (Journal of the linguistic society of Japan)*, 152, (pp. 1-29).
- Postal, P. (1974). *On Raising: One rule of English grammar and its theoretical implications*. Cambridge, MA.: MIT press.
- Rizzi, L. (1997). The fine structure of the left periphery. In L. Haegeman (Ed.), *Elements of grammar* (pp. 281-337). Springer, Dordrecht.
- Rizzi, L. (2006). On the form of chains: Criterial positions and ECP effects. In L. Cheng and N. Corver (Eds.), *Wh-movement: Moving on* (pp. 97-133). Cambridge, MA.: MIT press.
- Saito, M. (1985). *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*. (Doctoral dissertation, MIT).
- Saito, M. (1989). Scrambling as semantically vacuous A'-movement. In M. R. Baltin and A. S. Kroch (Eds.), *Alternative conceptions of phrase structure*. (pp. 182-200) Chicago: University of Chicago Press.
- Sells, P. (1987). Aspects of logophoricity. *Linguistic inquiry*, 18 (3), (pp. 445-479).
- Shima, E. (2000). A preference for move over merge. *Linguistic inquiry*, 31 (2), (pp. 375-385).
- 宗宮喜代子. (2007). 「英語と日本語の『時制・相』について」. 『東京外国語大学論集』 (73), (pp. 1-19).
- Taguchi, S. (2009). Japanese ECM as embedded bare topicalization. In M. Abdurrahman, A. Schardl, M. Walkow (Eds.), *Proceedings of the 38th meeting of the north east linguistic society*, (pp. 415-426.), Amherst: University of Massachusetts, GLSA.

- Taguchi, S. (2015). *Syntactic operations on heads and their theoretical implications*.
(Doctoral dissertation, University of Connecticut)
- 外池滋生. (1990). 「の」の論理形式—『は、が、も』の論理形式に続いて. 『明治学院論叢』
(467). (pp. 69-99).
- Uriagereka, J. (1999a). Chains of arguments. In S. Epstein and N. Hornstein (Eds.),
Working minimalism, (pp. 251-282.). Cambridge, MA.: MIT Press.